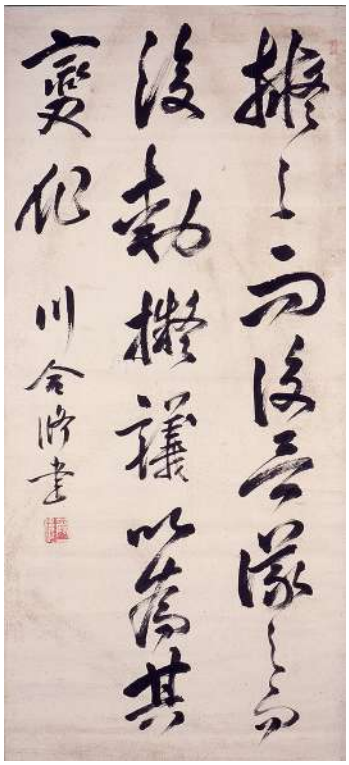
《展示のみどころ》

県立博物館企画展「江戸時代の書–きのくにの人びと 筆のあと–」

1　藩主の書 ― 書（しょ）「瑞雲（ずいうん）」　徳川治宝筆（とくがわはるとみひつ）（和歌山県立博物館蔵、展示番号１）

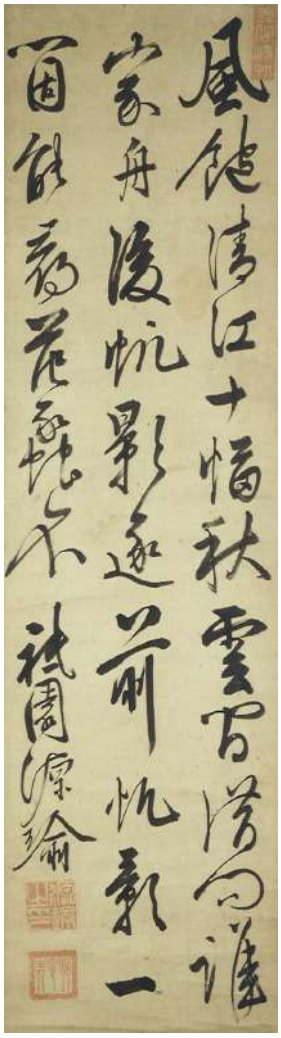
紀伊徳川家10代藩主・治宝(1771～1853)は、「文雅の藩主」として知られ、自らも書画などを制作した。これは自筆の大幅で（縦59.3㎝・横120.2㎝）で、端正な行書であらわす。「瑞雲」とは、吉兆（きっちょう）を表すおめでたい雲の意。



2　学者の書 ― 三行書（さんぎょうしょ）　川合梅所筆（かわいばいしょひつ）

（和歌山県立博物館蔵、展示番号 17）

幕末の漢学者・川合梅所(1794～1871)は、文学のほか書画もよくし、藩校・学習館（がくしゅうかん）の督学（とくがく）（校長）となった。川合小梅（こうめ）の夫でもある。この書は、『周易（しゅうえき）』から引用した句で、書風は中国・明時代の文徴明（ぶんちょうめい）(1470～1559）などの影響がうかがわれる。



3　文人の書 ― 七絶詩書（しちぜつししょ）「帆影（はんえい）」　祇園南海筆（ぎおんなんかいひつ）

（和歌山県立博物館蔵、展示番号 25）

紀州の三大文人画家の一人で、紀伊藩の儒学者であった祇園南海(1676～1751)は、詩・書にもすぐれていた。この書は、自作自筆の作品で、中国の故事をふまえながら、秋の川面にうかぶ小舟を詠（よ）む。中国からの強い影響をうけた「唐様（からよう）」の書風である。